

---

# 緋天日蝕 狂乱ノ蒼月

シクヴァル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋天日蝕 狂乱ノ蒼月

### 【Nコード】

N7271Q

### 【作者名】

シクヴァル

### 【あらすじ】

【狂気の月】世界に点在する神々の物語、それが今浸食されている。一つの神話により生み出された『悪』は他の神話さえ飲み込みんとし、ある者は染め上げられ、またある者は抵抗し。だが、それをせき止める両手は余りにも小さく

【嘆きの太陽】

## 三千年越しの舞踏会

死んだか

この状況下だ、何が起こつても不思議ではないが

どうだ、お前はまだ生きたいか？

あえてくだらない話からしてみようと思う。

国の繁栄を第一とする人間を右翼、世界平和を第一とする人間を左翼と呼ぶ。語源はフランス革命時、旧体制の維持を目指す派閥を議長から見て右、新体制の確立を目指す派閥を左に置いた事から。保守、革新とも呼ばれる。

右翼は国、または国民の保護のために意思を決定し、繁栄のためなら殺し合いも辞さない。逆に左翼は世界を平和に保つために行動するが、現場にいる人はおざなりにされる。両者の中間は中道と呼ばれるが、現代の国家運営において中道を保つことは不可能に近い。

また、日本のインターネット場ではネット右翼、ネット左翼が汚い罵り合いを繰り返す事がある。それぞれ日本大好きな自己中と日本大嫌いな自己中で構成され、「はやぶさ帰還神wwwブサヨ憤死www」とか「GDP3位転落wwwルピウヨ涙拭けよwww」とか言い合っている。

間違っても現実の右翼左翼とネットの右翼左翼を一緒にしてはいけない、根本的な存在意義が違う。

## 民族的思想の話

日本人は何か不満な事があっても怒らずに黙っていたりさりげなく指摘するのを美学とするが、大部分の外国人はその意味がわからない。ほとんどの場合はその場で怒ってクレームを出し改善を求める。店側にとつても言ってくれば対応できるし、問題点としての情報も手に入る。笑顔で帰ってブログで不満をぶちまける日本人にはいつしか『静かな爆弾』サイレントボムという異名がついた。

ただ、当の日本人は「んな短気なマネできるかボケエ」と思っていて、それを曲げる意志は無い、その必要も無い、ぶっちゃけ騒がれると迷惑だ。

## ドライブルールの話

韓国のドライバーは危機回避に定評がある。というのも彼らは後方への注意を一切断っているからであり、結果前方からの脅威に対して信じられないくらい強くなったからである。急旋回急ブレーキ当たり前、信号なんぞ無いも同然、そこに隙間がある限り彼らは直進し続ける。故に回避技術が超一流となり、どんなものに対してもさつとかわしてしまう。

本人は「事故つてないからいいじゃん」だが、世界からどう思われるかは『お察しください』

つまり、どんなものであれ、絶対に相容れない2つというのは存在するのである。

「目が覚めたか。どうなったか覚えているか？」

体育をやっているクラスの掛け声が窓ガラス越しに響いてくる。鼻孔には薬品独特の臭いが入って来て、ここが保健室である事を伝え

ていた。

視覚が戻ってきて、まず見えたのは赤色の髪と紺色のスーツ。ここは学校、どう考えても教師だ。ぼやけてよく見えないが、女性らしい。

「高天原高校2年情報科A組、出席番号24番の白兔<sup>はくと</sup> 大悟<sup>だいご</sup>。ここまでは大丈夫だな？」

今言われたプロフィールが自分らしい。少し考えてみればそうだった気がする。

ただ、何か妙に記憶が混濁していた。

母、兄、出雲

逃げる。何から？

「体は大丈夫そうだな」

女教師に助けられつつ上体を起こす。そこでようやく意識を完全に取り戻し、記憶も完全に復旧する。相変わらず意味不明な単語は浮かんでいるが。

「っ……」

自分がいるのは保健室だと視覚が確定させていた。真横にるのは保健医ではなさそうだが、白衣の教師は見当たらない。



その代わり、女子生徒が1人、窓際で壁にもたれ掛かっていた。肩に届かない短髪の髪は少しだけ焦げ茶がかり、ぱっと見の身長は150後半から160前半。襟章の色から判断すると2年、同じ年だ。制服であるブレザーに邪魔されているが、体に相当量の包帯が巻かれているようだ、そのせいもあってか見るからに不機嫌な顔で、睨み付けるようにこっちを見つめている。

しかし、それよりも目立つものが横に立てかけてある訳で。

剣、ぶつとい大剣だ。黒と紫で着色された左右対照の両刃剣が女子生徒左横に鎮座していた。

一通り室内を観察し終えてから時計を確認、午前11時26分。

「見えてるか？」

「まあ…なんとか」

赤髪の教師が覗き込んでくる。見事な赤色の長髪だが染めてる風は無く、よく見れば目も赤色、ついでに言えばだいぶ若い。

この目立つ髪はよく知っている、国語のある日は毎日教室までやってきていた。

「私はわかるか？」

「えー……榊原…先生」

「そつだ、榊原 日依」

国語教師だ。年齢不詳の居住地不明だがその目立つ髪色と若い外見から男子生徒に人気が高く、彼女の授業は出席率が総じて高いという。肝心の授業は、やや現代人の語学レベルを把握できていない感がある、どう見ても難しすぎです本当に。

「ちよつとこれを握ってみろ」

「？」

お札が1枚出てきた。

表面にタニシがのたくつたような文字が書いてある紙幣ほどの和紙だ。国語教師榊原はそれをなぜかピンセットで摘んで差し出している。

「……」

掴む

バチィ！と、電流の走ったような衝撃が来た。

「ふむ、成功か。喜べうまくいったぞ」

「いやその前に今のやつ説明欲しいんですけどねえ……！！」

勢い余ってベッドから転げ落ちた。威力は対暴漢用スタンガンほどあつただろうか、痛い。

何を喜ばいいのかと榊原を見れば、こっちに言ったのではなく窓際の女子生徒に向けて言っていた。当の本人は不機嫌な表情を崩さないまま右手をひらひら振って対応。

いいから早く話終わらせ、と言いたいようだ。

「とりあえず……何がどうなつてこうなつたんです？」

「ああ、それに関しては少し長くなる上に信じて貰えるか怪しいが」と、榊原が自分、白兔大悟を指差す。性格には腹部、つられて下に視線を移す。

「一度、刺されて死んだんだ」

制服に大穴が開いていた。

「……………これは誰に弁償させりゃいいんですか？」

「案外冷静だな」

「そりゃいきなりそんな事言われてもねえ……………」

話がぶつ飛びすぎているというかファンタジックというか。ここは地球であり自分は人間だ、刺されて死んだらそのまま火葬されるしかない。

「信じないならそれでもいい。だがこちらとしては君は貴重なケースでな、まず話を聞いて、できれば協力して欲しい」

「何に……」

「詳しい話は放課後にしよう。昼休みまでここで休んで、授業が終わったら図書資料室まで来てくれ。それまでアレに質問してもいい」  
言って、女子生徒を示した。相変わらず不機嫌だ、近付ける気がしない。

「じゃあ私は失礼する。放課後に図書室内の小さい部屋だぞ」

榊原日依がこちらに背を向け、保健室から出ていく。取り残されたのは大悟と女子生徒。

「……………」

「……………」

どうすりゃいいのこの空気。

「……………」

5秒程沈黙していたら、女子生徒が先に行動を起こした。大剣は放置して壁から背を離し、ゆっくり歩いて近付いてくる。さっきまでの不機嫌な顔はいずこかへ消え去り、不敵な笑顔を形成、不機嫌は嫌だがこれはこれで怖い。距離1mほどで停止したが、ベッドに手をかけてぐいっつと顔を寄せてきた。

「私の事は知らないよね？」

「あ……ああ……」

にいと口元を歪ませたまま問い、それから視線を下に移す。腹部と背中にはブレザーとワイシャツを突き抜けた大穴があり、素肌が見えている状態だ。体に傷は無く服だけが破れているので、変なフアッションに見えていただけでない。

「悪いけどこれは自分でどうにかしてね、今お金無いの」

「……なんつーか、自分がやりましたーみたいな言い方だな」

「まあね、あなたを殺したの私だし」

「……………なん？」

「ちなみにおあいこよ？私だって左腕吹っ飛んだし」

ほら、と袖を捲ってみせる。包帯ぐるぐる巻きだったのが、手首より

下5cmあたりが輪のように赤く染まっていた。ただ添え木のようなものは無く、普通に包帯が巻いてあるだけだ。

「もうくつついちゃってるけどね」

「……………何故くつつく……………」

「そういうもんだし。…ってなんか疲れてない？」

「お前らはもう少し常識というものを考えた方がいい……………」

話が奇想天外すぎて脳がついていけない。もういつそ芝居やってるでも思ってしまったおう、これはゲームの中だ、相手は台本通り喋ってるだけだ。

「話をまとめるぞ。まず何らかの原因で俺が暴漢と化した」

「察しがいいわね。詳しく言うと自我が吹っ飛んだっていうか覚醒に近いけど」

「それを止めるためにお前はアレで俺を刺し殺し」

「そこ行くまでに私がボコボコにされたのも忘れないでよ」

「……………じゃあ殴り合った末に俺だけ死んで、世間一般が認知しない何か超常的な技術により蘇生したと」

「ひよりちゃんかねー。どうやったのかはよくわかんない」

概ねわかった、一般人のキャパシティを超えている

「じゃあな」

「ちょっと待ちなさいな」

出ていこうと思ったら左腕を掴まれ、反転した体を再反転させられる。やめてくれ、本能が叫んでいるのだ『関わるな』と。

「あなたには期待してるの、だって私のこのケガ具合よ？ひよりちゃんをして『歴代最強』といわしめたこの私を」

「それはどんな最強なんだよ」

「だから今からそれを説明するんじゃない」

それ長くなりそうか？ジャージに着替えて購買言ってからじゃ駄目か？

なんて言ったら怒られそうなので黙っておく。キチガイの話には頷きつつスルーがベストだ。

「オーケーわかった、とりあえず君の名前を覚えてくれ、お花畑な人として記憶しておく」

ピキ、と青筋が立った、しかし笑みは崩れなかった。

「高天原高校2年C組芸術科、武内たけうち 氷澄ひずみ」

「芸術科あゝ？」

青筋が2つになった、しかしそれでも笑っていた。

これ以上余計な事言われる前に言いたい事言ってしまうおうと思ったらしい、説明に移る。話してる間は大人しくしておこう、早く購買に行きたいし、何より怒ったらきつと恐い。

「世界は侵食されようとしているの」

「中二病か」

さっそく決意が折れた

「私だってこんな恥ずかしい事言いたかないわよ!!」

怒られた

「……で、それを水際で食い止めるのが私達」

「具体的にはどう食い止めるんだ？」

「アレで」

大剣を指差す

さっきも言ったが太い剣だ、全長1mちょい、幅は20cmほど。



あれだけ大きいと重量もかさむだろう、案外怪力なのかもしれない。

「こうやって」

何かを引っ張る動作をした。こう、小型エンジンのスターターを引っ張るような。

「斬り殺す」

「……ちよつと待て間に入った動作の意味は何だ」

「それをあなたにも手伝って欲しいってワケ」

無視か

つまり何だ、異世界からやってくる怪物？を始末する作業に加われという理解でいいみたいだ。

「じゃあな」

「いじ」

今度は右肩を掴まれる。そこを力点にして女子生徒、氷澄さんと三度ご対面。

「どうも根本的に信じようとしてないみたいじゃない」

「お前はいきなり『アナタ二八不思議ナ能力ガアリマース』なんて言われて信じられるのか？」

「……無理ね」

「だろ？」

なら仕方ない、と背を向け、大悟から離れていく。帰ってよしという事でいいんだろうか、なら購買行かせてもらうが。

一応気付かれないように、そろーっとドアへと向かって、音を立てないよう開ける。

瞬間、視界が暗転した

「え……」

つい数秒前まであんなに明るかった、しかし、今はもう何も見えな  
いほどに暗い。

「じゃあちよつと実体験して貰いましょうか、今後の為にもね」

いや、違う、真っ暗になったんじゃない。

夜になったんだ、一瞬にして。

「『常夜』<sup>じようや</sup> っていうの。ここにいる間は時間の進行が無いから昼ご飯の心配は無いわよ」

背後から軽い声が響いてくる。次いで何か重たい金属を持ち上げる音。

「ただ私が解除しない限り一生ここでさまよう羽目になるけど」

振り返る

右手1本で大剣を持ち上げる氷澄がいた

「……これが…件の侵食されてるってやつ…?」

「んー、ちょっと違うかな。ここは普通の空間に物質情報を依存してて、見えないけど常に存在するもの、いわば裏側ね。けどまあそういう解釈でもオーケーよ」

氷澄背後にある窓の外では星が輝いている。現代日本ではほとんど見れない天の川が見事にかかっており、その右横にアンタレスを中心としたさそり座、更に右にてんびん座、春の大三角形。夏手前の南の夜空だと思われる、今は5月に入った所だから、季節は遵守しているようだ。

なお、グラウンドから響いていた掛け声は夜になったと同時に一切聞こえなくなっていた。

いなくなったのは彼らではなく大悟達の方だ、それくらいはわかる。

「ところで今からあなたをこれでぶった斬る訳だけど、何か言いたい事はある？」

「いや……いやいやいやちょっと待てちょっと待て!？」

ギューイイイイン!という何かが高速回転する音。見れば大剣の刃に細長く黄色い光がまとわり付いており、所々ちらついている事から剣身の周りを高速で周回している事がわかる。

そう、まるでチェーンソーのような。

「大丈夫、既にあなたは私と同類だから、手足吹っ飛んだくらいどーってこたないわ」

「でも…痛いんでしょう…?」

「そりゃもうめちゃくちゃ」

あ、まずいこの人キレてる。

## 回天舞舞

「だぁりゃあぁあぁ!!!!」

ドアから廊下にダイブしてそのままうずくまる。

ギヤリギヤリギヤリギヤリ!!という破壊音がコンクリートの破片をぶちまけた。

「おまつ…お前今完全に胴体狙っただろ!!」

「あら何の事かしらうふふふ」

横薙ぎに振るわれた大剣はまずベッドの仕切りを両断し、次いでコンクリの柱、木製の扉、壁、金属の棚までを美しささえ感じる真一文字で切断した。もし跳んでいなければその扉と壁の間に大悟が入っていた事は間違いない。

「大丈夫よ胴体だって再生するわ。試した事無いけど」

「おいしいい！！」

捕まる訳にはいかない、何せさっきの話に従えば既に1回喰らっているのだ。そう何回も脊椎断裂される言われはない。それにあの性格だ、「前後逆にくつつけちゃったー」とか必ずやる、絶対にやる、それでもう1回斬られるとかそういうオチに違いない。

逃走、逃走、逃走。

「大！！斬！！撃！！いいい！！！！！！」

2秒で追い付かれた。

「うわああああ！！！！？」

今度の犠牲者はリノリウムの廊下。コンクリの上にシート敷いただけなんだへーなど考える暇も無く、崩れた体勢を直して氷澄に向き直る、逃げるのは諦めた。

「……今の避けられるのは予想外だったわ」

「脳天直撃コースだったぞ!？」

稼働し続ける回転鋸を引き抜き、ギチリと切っ先を大悟へ向ける。  
剣単体でも十分な殺傷能力があるだろうに、なぜ回転させようと思  
ったのか。

「アメノハバキリ。かつてスサノオノミコトがヤマタノオロチを切  
り刻んだ時に用いたものよ。切断力を高めるギミックがあるのは当  
然でしょ？」

先読みして説明してくれた、ぶっちゃけいらん説明ではあったが。

しかし

スサノオ？

何かスイッチが入った

「む……」

あれだけ怖かった回転音が聞こえなくなる。別に真の自分が覚醒し  
たとか一瞬で武道を修得したとかそんな感覚は無い。

これは恐らく『慣れ』だ。

それには氷澄も気付いたようで、突き出していた大剣アメノハバキ

りを引き戻し、両手に握り直した上で頭の右に構える。剣道における八相の構えに似ているが、切っ先は倒れて大悟に向き、姿勢も中腰並に低い。どう打ってくるかは不明だ。

「いきなりどうしたの？」

「さあ？」

姿勢は低く、視界は広く。

右足を少し後ろへ伸ばし、飛び出す体勢を整える。

距離、目測3メートル。

「ッだあ！！！！！」

大きく踏み込むと同時に手首を回して遠心力を入手、ただでさえ高い切断力をさらに高めつつ袈裟斬りに振り下ろしてきた。

大悟から見て左上から右下へ、穴は左下だ、そこに潜り込む。そうしたら真横に氷澄の足が来るので、正面衝突のエネルギーをそのまま利用するべく足払いをかけ

「ッ！！！」

跳躍により回避される。新体操選手も拍手ものの捻り込み1回転を決め、大悟後方に着地、そのまま真一文字に第2撃を入れてきた。

「今度こそもらッ！！！」



大剣の柄を蹴り上げる

「た……あ……？」

持ち主の手元から弾け飛んだそれは窓ガラスを突き破って外に消え

直後、キン、と耳鳴りがして、世界に明るさが戻った。

「……………」

「……………？」

解放された職員玄関から一際大きく体育の声が響いてくる。授業中のためそれ以外に目立った音は聞こえず、氷澄の硬直も相まって、何か妙な静けさが大悟を取り囲んでいた。

今起きた事が信じられないとばかりに驚きの表情で固まっている。左から右に振り抜いた体勢のままなので、変なオブジェといえはそう見えなくてもない。

「……………」

「……………」

「……………何」

荒ぶる鷹のポーズで対抗するのはまずかったか。

「なるほどねえ……………」

硬直から立ち直り、武器を失った両手を見つめる。その後諦めたように溜息をつき、大剣が消えていった窓へ歩いていく。

そこはさつき盛大に割れたはずだが、何事も無かったようにしつかり窓枠にはまっていた。向こうの世界でどれだけ破壊しようがこっちは持ち越されないらしい、勝手に修復されるのか、根本的に違う世界なのか。

「あ…まず……………」

「ん？」

窓から外を見る。

いくら修復されるといっても空中にいきなり現れた異物には対応できないようだ。

アメノハバキリは進路上にあった力カシの首を両断し、その先の植物資源科の畑に突入、何かの苗を盛大に掘り返していた。

「じゃあね！放課後ちゃんと来なさいよ！」

氷澄が走っていった。

「……はぁーっ……」

怖かった

何なんだあの子

畑に飛び出してまずカカシを修復しようとしている。綺麗に切断された首部分に添え木を追加し、そこらにあった針金でぐるぐる巻きにした、結果ぐらついているものの修理には成功、小首かしげてるカカシを作るとはさすが芸術家。そうしてから大剣を握って力いっぱい引き抜く。

「にゃっ!？」

転んだ。

「大丈夫かー？」

「っ…いいからアンタは昼食行きなさいよもう!」

今のはだいぶ恥ずかしかったようだ、すぐ立ち上がって簡単に土を払い、飛び散った苗を埋める作業に移る、頬には赤が混じっていた。

「昼食行きなさい言われてもねえ……」

白兎大悟はこの状況を無視してメシ行けるほど冷たい人間ではない、例え数十秒前に斬り殺されそうになった相手だとしても、明確に悪意があつた訳では無し。

少し先にある昇降口で自分の靴を手に入れて、畑に降りる。

「……もしかして農作業とかしたこと無いのか？」

「土なんて……！練って固めるためのもんじゃない……！」

それは粘土だ

全体的に土かけすぎ、というかほとんど埋没している。いちいち教育するのも面倒なので氷澄の横にしゃがみ込んで余計な土を払っていく。それを見て一時作業を中止した氷澄だったが、すぐに手を動かし始めた。どんな表情だったかはあまり見えなかったものでわからない。

「こんなもんだろ」

一通り苗を元に戻し、立ち上がって畑から出る。素人にしてはよくできた方だ。

「草なんて埋めときゃいいと思うんだけどねえ……」

「光合成って知ってるか？」

「そのくらい私だって知って…わっ！」

また転んだ

「…………大丈夫か？」

手を差し出す。少しむっとしたが、掴んで、立ち上がる。

「あんた物好きねえ。マゾ？」

「……………どっちかと言われれば」

「……………」

「いや引くなよ、どっちなからだぞ、引くな、引くなよおおおお  
お！……！」

「……」

「……」

「……どうしてこうなった？」

「私に聞かれても」

順番に整理しておこう

まずジャージに着替えようと教室に帰り、机の上に新品の制服が用意されているのを発見した。一緒に残された書き置きから察するに、榊原先生が用意してくれたらしい、ありがたく袖を通して、他の生徒より一足早く購買へ。

それで…そうだ、購買前で氷澄と遭遇した。昼休み前の授業中なので鉢合わせする可能性は元から高かったのだが、食堂入口で綺麗に対面するとは思わなかった。一緒に購買に行き、カツサンドか焼きそばパンかで少々の口論になり、うだうだやっているうちに生徒が集まってきてしまったためほとんどランダムでパンを掴んで会計、脱出。

気が付いたら屋上であんパンを啄んでいた。

「なぜ人間は選び放題な時に限ってこんなどうでもいいものを引き当てるのか」

「奪われたくない、独り占めしたいって思ってるから焦ってそうなるのよ、独占欲が強い証拠」

なるほど

「それにまだマシじゃない、私なんかバターロールよ」  
なるほど

「そっちの方が独占欲強いじゃん」

「それは、まあ…内蔵されたやつの特性というか……」

内蔵？

「……仕方ないし、もうちょっと詳しく話してあげるわ」

「あの超絶非科学的な話の続きか？」

「……………」

何か言いたそうな顔をしたが、否定はしなかった、自覚はあるらしい。

溜息ついてバターロールを最後まで食べ切りお茶のペットボトルを開ける。

「結局ね、体は人間そのままなのよ。あるモノを体内、正確には脳に入れて、能力を底上げしてるの」

「へー」

「……なんか投げやりね」

「呆れたっつーか慣れた」



いきなり夜になったと思ったら息つく間もなくチェインソーぶん回されたのだ、今更何言われようが動じるつもりはない。驚かせたければそれ相応のネタを持ってきて頂きたい、例えばTOD2のバルバトスとアナゴさんは中の人が同一人物だとか、あのNEAとこのネアは同一人物だとか、グラハムエーカーとミスターブシドーは同一人物だとか。

「あなたはつい数時間前に神となりました」

コーヒー吹いた

「中二病かつーの！！」

「いやこれが真実だから面倒でねえ……」

ははは、と乾いた笑いが氷澄から漏れる。

「神様を降ろしてきて体に入れるの。それをジェネレーターにして魔法みたいなもの使ったり、再生力をカンストさせたりする訳。どう  
いう能力が出るかは入れた神によるらしいけど」

「……人体の限界はどうなってる……」

「肉体の耐久力はあるま変わらないけど、細胞の増殖限界は無視できるといって……大丈夫？」

「今更何言われても驚かないと思ったんだがなあ……」

天を仰ぐ、空は青かった。

神か、そんなもんにはなりたくなかった。その地位を手に入れるために世界と戦った少年は志半ばで倒れたが、奥さん、案外簡単に手に入るみたいですよ。

で、どうなの？心臓発作で人殺せるようになる？

「いきなり特殊な能力が手に入る訳じゃないわよ、術に関しては伸びやすい特性が付くっただけ。特化するんじゃないから訓練すればたいていどうにかなるけど」

「チエーンソー回したりか？」

「それは剣の能力」

私自身の力じゃないのよ、と言いつつお茶を一口。何か気に食わなかったらしくパッケージを睨み出した。

「やっぱりさあ、ボトル詰め緑茶売るより茶葉とお湯売った方がいいと思うのよ」

「ペットボトルの存在意義に真っ向から喧嘩売ってる主張だな」

「利便性は認めるけど敢えて緑茶を詰める意味がわからないわね、フアンタとかコーラとかそれ専用のやつでいいじゃん」

「最近の若者は急須で入れる緑茶の味なんてほとんど知らないんだよ」

若者のする会話ではないと思う。

「……まあ、内蔵されたのが武神だったりすると基本戦闘力も高く出るみたい。…ぶっちゃけ何が入ったかわかんないけど」

「わかんねえの？」

「だって緊急事態だったし…」

氷澄が少々言い淀む。

色々あって忘れていたが、大悟がこんな奇想天外な事に巻き込まれる根本的な原因を聞いていなかった。よくわからないがかなり暴れてしまったようだし、氷澄だって出会い頭にチェーンスーヴィーインした訳では無いだろう。

いつものように登校した白兔大悟は待ち構えていた大妖怪に襲われその衝撃で真の力が……無いな。

「緊急事態つてのは、隠岐の大天狗が攻め込んできたのよ。日本三大妖怪に数えられてる奴でさ」

「つてうおおおい!!」

「え？」

有った、有ったわ。

「……そいつは正面口から堂々と侵入してきて、宣戦布告するかの如く生徒1人に襲い掛かったの。その後で常夜展開してスクランブル、わかってると思うけど生徒1人つてのがあなた」

あるんだなそんなベタな展開とか思う、天狗に刺されて本当の私デビュー!…おいやめろ。

いや、殺したのは氷澄じゃなかったか？

「そいつは？」

「私が着いた頃には死んでた。それで、代わりにもつと厄介なのがいたってワケ」

なるほど、そこで暴走開始したらしい。どつりで記憶が無い訳だ。

「後は私とあなたのタイマンよ、ギリギリ勝ったけどね」

「暴走した理由は？」

「そんなすぐわかったら苦労しない」

理由未だ不明と、将来的には解明される言い方をしたが、暴走なんて頻繁にするもんでもないだろう、早いうちには特定して頂きたい。

「まあ…この学校はこういう事やるために作られたから、誰がやられても結構な確率でこうなった気もするけど」

「え？」

「素質持った生徒が集められてるの、逆指名されて入学したでしょ」

そういえばそうだったか、確か3年の身体測定が終わったあたりで教師に呼び出され、あれよあれよと進路決定したんだった。おかげで受験シーズンはかなり楽しく過ごさせて貰った。

その代わり、入学してから地獄な訳だが。

「ま、詳しい事はひよりちゃんに聞きなさいな」

言って、氷澄が立ち上がる。

「最後にひとつ」

「んー？」

「その…妖怪とか何やらかと、俺も戦うのか？」

「そりゃ本人の意思でしょ、強制したって何の意味も無い」

本人の意思、か。

「なぜ戦おうと？」

「……当ててみなさい」

ニヤリと笑い、階段方向へ。そのまま氷澄は消えてしまった。

「……………戦闘狂って訳でも……………いや否定できないのな」

## 斬撃

かくして放課後、しつこくカラオケ行こうと誘ってきた友人を振り切って4階まで登り、図書室への扉を開ける。ひとつの階を丸々使った巨大な部屋にこれでもかと本を詰め込んでいて、所蔵量は大学レベル。放課後は勉強したい生徒がちらほら現れる。あと最近の学内図書室に見られる傾向として、ファッション誌やアニメ情報誌が一番目立つ位置に置いてある点が特徴、ライトノベルも相当数貸し出し中。

今日は定期テスト前でもないので勉強している生徒はおらず、読みたい本を探す眼鏡っ娘と、携帯ゲーム機で通信対戦に興じる男子2人がいる程度だった。特に仕事もないようで、図書委員も読書に没頭している

「……ふむ……」

あの図書委員は有名な図書委員だ、黒いストレートの髪と整った顔の作りで入学式当初から目立ちまくり、学園のマドンナ（80年代）とか学園のアイドル（90年代）とか俺の嫁（00年代）とか呼ばれている。要するに美人な訳だ。

このはな  
木花 さくや 咲夜、1年、植物資源科。

まあ美人だけでなく本来なら関係無い事であるが、大悟の目的地へ通じるドアは彼女の背後だ、話しかけて中へ入る許可を貰わなければならない。

ゆっくり歩いてカウンターまで移動、向こうもそれに気付いて顔を上げ、途中で本を持っていない事に気付く、バーコード読み取り機を元に戻した。

「えー…その奥に来てって言われて来たんだけど」

「あ、はい。白兔大悟さんですね、承っております」

根回しはしてあったらしい、言つてすぐに笑顔になり、机に貼つてあった紙片を剥がす。代わりに呼び出しベルを置いて、椅子から立ち上がった。



「もう少しでこちらに来ると思いますから、それまで中でお待ち下さい」

図書資料室のドアを開け、カウンターの内側へと誘導される。初めて入ったが大方の予想通り本だらけで、4面ある壁のうち2面が本棚で多い隠されており、中央にはパソコンの乗ったテーブル。左の壁にはもうひとつドアがある、この先に部屋などあるのだろうか。

「18分遅刻」

そのドアの横のソファ、焦げ茶髪の女生徒が読書に勤しんでいた。

「……ホームルーム終わって1分でどうやって来たって?」

「無理じゃないでしょ、ダッシュしなさいダッシュ」

「授業終了5分前に帰り支度始めるタイプだろお前」

「……………何か問題でも?」

とりあえずバッグをテーブルに置き、氷澄側の丸椅子に腰掛ける。足組みながら読んでいるのは小型のハードカバーで、表紙にはタイトルしか書いていない、何の本かは計りかねた。

「まあ、逃げずにちゃんと来た点は褒めてあげる。性格からしてすっぱかすと思ってたんだけど」

「来るだけはな、その先はまだ未定だぞ」

「えーえーわかってるわかってる」

本から目を離さないまま答える。氷澄さんは昼と違って上機嫌なように、笑顔が不敵でない上に声も軽い、何かいい事でもあったのか。

「1人あたりの仕事量半分…給料据え置き…ふふふ……」

どうやら良からぬ事のようにだ。

「粗茶ですが」

「あ、どうも」

緑茶を出す木花咲夜、その後大悟の隣の席に氷澄用も配置。お盆を片付けてから、図書委員の仕事に戻るためか部屋の出口へ。

「どうぞゆつくり」

出ていった。

「……メンバー構成とかどうなってんの？」

「今のところ戦闘要員は私だけね。あの子は教育中だけど戦闘にはまったく向かないし、ひよりちゃんはおバースペックだし」

ああ、マイラブリーエンジェルさくやたん（10年代）も既に人間を辞めていたか、その情報が全校生徒に知れ渡ったらどれだけの人間が暴徒と化すだろうか、まだファンクラブとかは設立されていないようだ。

しかし、ごく一部の方々は萌える、絶対に。

「一人でやってんの？」

「今はね、運がよければ今日中にもう一人増えそうだけど」

「……………」

「いや別にどっちでもいいわよ、真剣に困ってる訳じゃないし」  
「ぱたりと、読んでいた本が閉じられる。」

「強制できる類のもんじゃないしね、肉体的にも精神的にも」

笑顔

これと同じ顔が不敵に歪んで大剣振り回してきたとは、女というのは恐ろしい。

「…………その件について午後の授業中考えてみたんだが」

「ん？」

「妖怪やら何やら言っても、それがそのまま…実体化？してる訳じや無いんだろ」

「例外除く。すば抜けて高位な神様ならそのまま降りてくれるし、その逆の場合でも怨念自体が肉体を持つ事もあるけど。まあほとんどはご想像の通りよ」

「つまり、相手も俺らと同じ」

「そ、生身の人間」

喫茶店で飲み物を頼む時くらい軽い口調で、その単語は発せられた。

言った直後、氷澄の顔には昼の不敵さが戻り、ソファにもたれ掛かった体勢も相まって見透かされた気分になる。考えてる事は全部わかるとでも言って来そうだ。

「……相手が人間で…それを？」

「言っただじゃない、斬り殺すって」

「……………」

「だから絶対に強制できない。法律上の罪なんていくらでも揉み消せるけど、精神面でそれを許容できなければ戦わせる意味は無い」

それでも誰かはやらなきゃいけないんだけどね、と付け足し、ソファから丸椅子に移動した。緑茶入りの湯呑みを左手で引っ掴んで、中身を一气飲み。

「殺さないといけないのか？」

「放置したら三桁単位で死人が出る」

百を守るために一を殺す

よくある話だとは思っていたが

「でも、拒否するんでも話だけは聞いてくように。どっちにしろ、あなたはもう人間の枠組みから外れてるんだから」

「……ああ……」

「ああ、来てくれたか」

重い話に区切りをつけ雑談すること数分、目立つ赤髪の国語教師が入ってきた。職員会議の後すぐ来たらしく普段生徒の目に入らないような冊子を携行し、ついでにテストの答案も持ち込んでいる。ここで仕事するようだ。

「どうだ？どこまで説明した？」

榊原はまず氷澄にそう問いながらテーブルに紙束を置く。そして問われた氷澄さんが親指を立て、先端を奥のドアへ。

「とりあえず実地研修」

「そうか」

少し待っていると言いながら奥の部屋に消えていく。氷澄はお茶のおかわりが欲しくなったらしく急須へ寄っていき、ついでに置かれた紙束を覗き始めた。

漢字のテストだった、1週間前に大悟も受けている。普通に授業を受けていれば何の問題もないが、満点を取るのは恐らく無理だろう、あからさまな満点阻止問題が混ざっていたのだ。

漢字に直せ

『ぼろ』・つぎはぎだらけの衣類のこと

アホかと思う。

「赤…ッ!？」

目的のブツに達して何か見てはいけないものを見たような顔になる氷澄さん。色的にも評価的にも真っ赤っ赤だったのであろう、膝について轟沈していらっしやる。

赤い点数を取った場合は何があったか。確か書き取り100回とかそんな小学生レベルの課題を出された気がする。

「っ!!」

「!？」

鋭い目つき（泣）で睨まれた。

「……もしかして……勉強時間削られてたりするのか……？」

「そりゃ……いや……あなたには関係ないわ、うん」

無理矢理笑って首振りし雑念を振り払う。相当無理してるようだな  
んかもういたたまれなくなってきたが、与えられた情報を統合する  
と大悟に手伝えるかという又何とも言い難い。誰だって殺人などや  
りたくないのだ、例え最近の危険な若者であっても。

結論を出すにしても実地研修とやらを終えてからで

……実地研修？

「待たせたな、こつちだ」

いつの間にか背後に赤髪が立っていた、準備完了らしい。

「とりあえず我々が何と戦って何を阻止しているか見て欲しい」

「……相手は人間って聞きましたが」

「そうだな、だが完全に生身の人間という訳でも無いんだ」



倉庫、いや倉庫ではないかもしれないが、少なくとも大悟には倉庫に見えた。使っていない道具や資源を備蓄している場所は普通倉庫と言っだろう、それと同じだ。

左、銃器類

正面、物資、メンテ具、弾薬

「危ねええええええええええええええええツ!!!!!!」

「声がでかい!!」

後ろから蹴り倒された。

「各所に話をつけてあるから合法じゃないけど違法でもない、だからって騒ぐとバカが忍び込む可能性が出んの、オーライ？」

「お……オーライ……」

改めて室内を確認、大別してまとめると、保管してあるのは剣、銃、消耗品。どれを取っても殺傷能力は高そうだ。刀剣類は氷澄のものと同じようなファンタジックな代物中心で、基本的に日本製、ちらほらと西洋風が混じっている。そのすべてがああチェーンソーのよ

うなお花畑な能力を持っているんだろう、よく見ればチェーンソーも安置されていた。

そして銃器類、拳銃が数種類端に固まって壁にかけられている。大悟がわかるのはここまでだ、後は何かゴテゴテしたのが並んでるようにしか見えない。

「これ、流通は……」

「火器は中古か、試作品だな。残念ながら最新の制式装備は手に入らないが、性能だけならなかなかだぞ」

例えば、と言いながら銃コレクションに歩み寄り、そのうち1丁を持ち上げる。まず第一に大きく、弾倉が2つついていた。側面のジョイント部分から察するに2丁の銃を接続したもののようで、上部にも何かの電子装備を追加、いわゆるハイテクというやつだ、ここ数年で開発されたものだろう。

「XM29」

「…使えと？」

「いや、これは少々重すぎる」

XM29とやらを壁に戻し、反対側の壁、刀剣類から日本刀を1本選出、こちらへ渡してきた。

「とりあえず護身用として持っていてくれ、宿らせた神の記憶が多少は流れ込んでいるだろうからただの素人よりは扱えると思う」

細い刀身だがズシリとくる、やはり模造品ではなく本物だ、これを振り回すとなるとかなりの腕力がいる。

などとやっているうちに氷澄さんはこっちの数倍重そうな大剣を持ち、何かでかいリボルバーみたいなのを壁から取り上げ腰に装着、ダイエットってレベルじゃない。

「別に筋肉ムキムキな体じゃないからね。見たい？」

「いえ特には」

「即答… かよ……」

なんか落ち込まれた。

## 見学一回九十里

「出雲へようこそ」

「……………何が起きたし」

生い茂った木々、石畳の参拝道、巨大な社。まさしく出雲大社だ、日本で一番有名な神社である

なぜこんなことになってしまったのか、それを語るには30秒ほど時間を遡る事になる。

榊原氏は討伐すべき対象の中から危険度の低い相手を選別してくれたようだ、何でも対象の境内侵入を阻止しろとの御達示らしい。大悟に向かつて喋っていた訳ではないのでこの国境かは聞き取れなかったが、なるほど、我らが日本神話総本山だったか、浅間神社くらいにしてくればよかったのに、学校の近くにひとつあったら確か。

それで問題はその後だ、直径20センチほどの青銅で形取られた鏡が出てきた。そこからの経過を単純に現象だけ言つと、光を反射するための鏡が生意気にも自ら発光し始め、重力を無視して2メートルほど浮上、「構成記憶」とか「分子化システム起動」とか「弾道計算開始」とか榊原が呟いた後、「発射」の一声でホワイトアウト、気付いたら鳥取の石畳に寝転がっていた。

「大事な事なでもう一度言おう、何が起きたし」

「ひよりちゃんからのエネルギー供給をオモイカネ経由の制御で安定させた物質転送システム、だっけ？」

「なんじゃそりゃ……」

「ブラジルまで2秒で行けるんだって」

「……………マツハ454かぁ……………」

とりあえず石から尻を離し、横にあった狛犬の頭をつついてみる、本物だった。

「で、どうすんの？」

「あの鳥居を越えられたら私の負け、その前に仕留められたら勝ち。今から観戦してもらうから」

「応援してりやいいの？」

「黙って眺めてなさい」

言って、氷澄は札を1枚取り出した。昼に保健室で触らされたあの札だ、結構なスパークを受けるのは大悟だけだろうか、ピンセットで摘んでたあたり榊原も怪しい感じだが。

その札を2回ひらひらと振って、それから手を離れた、重量に従って落ちていく。

「うーん、町の方でぶらぶらしてんのかなこれは」

「……今何やった？」

「説明すんの面倒だからカットで」

酷い

氷澄が見ている方向へ視線を向けると、神社出口、その先の出雲市市街が見えた、目標はあそこにいるらしい。普通ならそのまま歩いて出ていくのだが、剣とか銃で武装してる訳で

「武器はとりあえずここに置いて」

と、道から外れた茂みの中に大剣と巨大リボルバーを放り込んだ。

「大丈夫なのかよ？いきなり必要になったりしたら」

「大丈夫大丈夫」

枯れ枝等でうまく武器を隠した氷澄は次いで携帯電話を取り出し、メールを打つこと1分、出口へと歩き出す。

「あ、観光したい？」

「そうだなあ、隣にいるのがもうちょっとモデル体型に近かったらそういう気分にもなったんだろうがなあっ……！！！！」

言ってる途中でつねられて脇腹に激痛が走る

「……………まあここはよく来るから見たい時に見ればいいわ」

全体の半分ここ、といいながら道を降りていく。どうやら次あるかもわからない段階だというのを忘れてるようだ、鳥頭、声に出したら殴られるだろうか。

しばらく歩いて川を越え町の方に出る、日が傾いて来ている上に平日なので参拝客はそれほど多くなく、静か、というか閑散としていた。不景気の影響だろうか、夕日に照らされて下校する中学生が数

人いるのみ。後はまあ、名前も知らない虫が鳴いているくらいだろうか。

「場所わかんのか？」

「大体は」

分かれ道の度に札をひらひら振って、数秒悩んだ後に再び歩き出す。どうやらあれで探知できるらしい、説明は拒否されたが、恐らく氷澄自身の能力とやらで間違いないと思われる。

日本神話についてはあまり詳しくはないものの、神の総数は八百万、現存する物語に登場するのは100ほどで、そのうちの戦神を抽出するとなると、スサノオとかタケミカヅチとかほんの数柱まで絞られてしまう。まして女性となると探し出すのも難しくなってくるはず。

となると

「もしかして今、魔法使いが銅の剣装備してる状態？」

「……時代はマルチロールよ」

「どうやら図星らしい」

「まあ、ちゃんとした前衛がいてくれれば専念してもいいんだけどねえ」

「へえー」



「……………へっ……………」

あからさまにすつとぼけると、苦笑いと薄笑いの混じった顔をしながら札を振る作業に戻った。そのまま数秒歩いて、今度は止まる。

「……………反対…側?…」

「何が」

反転、疾走

「ナメんなやごるあああああああッ!!!!!!!!!!」

行ってしまった

「……………ってちょっと待て置いてくな迷子になるだろがああああ  
!!!!!!!!!!」

狼少年は助けて貰えない1

名前：白兔大悟  
年齢：17  
状態：迷子

「勘弁してくれ……」

あの疾走速度は絶対に人間の限界を超えている、簡潔に表すなら『ウサイン・ボルトがトップスピードでトラック5周』といった所だ。まあ、数秒間とはいえそれに追従していた大悟もいるんなステータスがカンストしているような気もするが

こんなことになるなら携帯番号聞いとけばよかったか、いやそれもそれでめんどくさそうだ。幸い出雲大社と出雲市駅の大鳥居は見えているので、あそこに戻って待つか、最悪新幹線で帰宅することもできる

とりあえず、見失ってからそう時間はたっていない、後々付けられるであろう言い掛かりを受け流すため搜索だけはしておこう

「すみません、鬼のような形相の女子高生がどっち行ったかわかりませんか」

「ああ、あつちに行きましたよ」

鬼のような云々だけで通じるとは正直思わなかった、やはりあの速度は目立っているのか

爽やかな笑顔の青年にお礼を言って小走りにそっちへ向かい、ホテル街に突入、数秒見回してUターンする。これは違う、何がかはわからないが本能がこっじゃないと叫んでいる、というよりは、制服姿でそこをうろつくのは危険すぎた

「見つかりませんでしたか」

爽やか青年が話し掛けてくる。さっき道を教えてから数十秒、教え  
た道を逆走されたらそりゃ結果を聞きたくもなる。が、さっきの位  
置から一步も動いてないってのはどうかと思う。

「あの速度じゃ追いつくのは難しいでしょう、何か別の方法を考  
えないと」

「いやいいんだ、搜したっていう事実が重要なんでな」

「はははは」

となるとどうするべきか、安全策を取るなら出雲大社で待ち続ける  
べきだが、あの様子では氷澄が帰ってくるまで時間がかかる、最低  
でも数十分の暇潰しが必要だろう

午後5時、夕食には早いがそつえば昼がアレだった

「そつ思い付いた途端に腹減ってくるんだからな……」

「ならすぐそこに出雲そば屋がありますよ」

とてもイタリアンな感じの料理が出てきた

「……………」

出雲そばとは蕎麦の実を殻ごと挽いた粉で作った麺で、郷土料理三大そばに数えられるとか何とか言う説明書きがあり、実際その通りの麺が出てきたが、めんつゆには確実にトマトが入っている、それを煮詰めて煮詰めてドロドロにしたらしく、10人に『これは何か』と聞いたら口を揃えて『スパゲッティ』と答えるだろう

「何この…何？」

思わず呟いた

「創作そば」

聞こえていたらしい、テレビの前に陣取った女性店員が短く返答。なお、店内にいる人間は大悟とその店員2人のみである

「出雲そばを頼んだつもりなんですが…」

「……………創作出雲そば」

恐らくメニューなんて存在しないのだろう

「まあ……」

食えるものならなんでもいい、そう思い込んでイタリア風出雲そばを口にする。見た目はアレだが味は案外……いややっぱりアレだ。なんとというか茹ですぎである、パスタは固めに仕上げるのが基本という性質上、例えそばにとって最高の茹で具合だとしてもくっ付いた感じが残っていらっしやらない

「ふむ…やっぱり合わないか」

「やっぱりと申されますか」

「もしくは味噌煮込みスパとか……まあいいわ、おフランス製エナジーバーをあげよう」

銀色の包装がされた棒を投げて寄越した

「代金もいらない、気が向いたらまた来なさい」

手をひらひらと振って、以降テレビから目を離す事は無かった。どうやら本当にタダでいいらしい、代金取られたらそれはそれで文句言っただろうが

引き戸を開けて外に出、振り返って店名を確かめる、喫茶店『ストライクイーグル』、前衛的すぎた

「おや…?」

「ん?」

声につられて後ろを向き、先程の青少年がいるのを発見、なぜか妙に汗ばんでいた、息も上がっているようである

「口に…合いませんでしたか……」

「口に合ってレベルじゃねえな。それでどうした?」

「少し鬼ごっこをね……」

そんな全力でやったのかと

「捜し人は見つかりました?」

「見つからねえから出雲大社戻ってようかと思ってた所だ」

「まあ、それが妥当でしょうね」

実際問題氷澄がどこに行ったかまったくわからない、なら早めに戻っておいた方がいいだろう、もしかしたらもう待っている可能性もあるし

まさか先に帰ってたりとかはしていないと思う、さすがに

「出雲大社ならこっちから行くのが近道です」

「そうか」

示された道を確認し、足を動かしてそっち方向へ

と

3歩進んでそこで止まった

「……………」

「おや？」

「……………」

「うん？」

どうしたのかわからない、という顔だ。どうせ演技だろう、地元民であればこの間違いはありえない

「……………出雲駅と出雲大社は一直線の通りで繋がってて、それぞれに大鳥居が立ってんだ」

「はい」



「これがまたバカでかくてだな、相当遠ざからない限りどこからでも見えるんだ」

「そうですね」

あれ、と指差す。巨大な赤い鳥居が2つ、数多の家屋を乗り越えて突っ立っていた

「そして今お前が教えた近道」

指を反対方向へ

「悪いが俺には近道とは思えない」

「……………」

青少年は笑顔のままだった

思い返せばそうだ、ホテル街への誘導、美味しいと言い難い店の紹介、完全に正反對な事を教えてきている

であるならば、この道を行っただとしても出雲大社に着くとは考えられない

「お前……………」

動きは右の方であつた

「はあ…はあ…やっと追い付いた……」

身長160cm前半、茶色い短髪、高天原高校指定のブレザー

ウサイン・ボルトも真つ青の速度で大悟を置き去りにし以降のこうなる元凶となつたマジカル(?)女子高生、武内氷澄さんである

距離10m、町中走り回っていたのか、フルマラソン直後のような疲れよう

「つつとにあつちこつちとよろちよろ手間かけさせやがつて…!!」

「え…? いやそんな動き回ってはいない…ような……」

ここから100m以内でたむろしていただけたとは自信を持って言える、それをあつちこつちと言うかどうかという話だが

「覚悟…できてんでしょうね!!」

返答は、暗転だつた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7271q/>

---

緋天日蝕 狂乱ノ蒼月

2011年10月5日22時15分発行